

# Izaak Walton の *The Lives* とアングリカンの人間像

曾村 充利

## はじめに

Izaak Walton (1593-1683) の *The Lives* 『伝記集』はアングリカニズム擁護の書であった。ウォルトンは、素朴で柔和なイングランド人の考え方と振る舞いの模範を、5人の伝記を通して文学の読む楽しみと共に示し、英国国教会信者のアイデンティティに形と内実を与える役割を果たしている。ウォルトンは無敵艦隊への勝利の後に生まれ名誉革命の5年前に没し、その生涯はアングリカニズムの成立時期と重なっている。ダンの友人であり説教集序文の『ダン伝』を書いたことで聖職者たちに知られた。妻は宗教改革時の大主教クランマー一族の娘であり、国教会保守派聖職者に多くの友人を持ち、内乱・空位時代には彼らを支えた。

## エリザベス女王の中道統治の包括性

宗教改革後のイギリスは、権力の交代と共に教会体制が変わり、思想信条が原因で身分や地位、名誉、財産ばかりか生命まで脅かされる時代が続いた。大陸と比較すると相対的に安定していたが、カトリック勢力は、トリエント宗教会議で理論武装をし、法王のエリザベスの破門、北部反乱、暗殺計画、スペインの無敵艦隊、イエズス会士の渡英宣教師などで、英国の再旧教化を目論んでいた。ピューリタンや非国教徒は、「聖書のみ」「信仰のみ」「万人牧師説」を掲げ、改革の徹底を求め国教会の伝統的要素を批判し、また終末論を信じる者も多く、説教とパンフレット等で民衆の扇動を繰り返した。これに対しエリザベスの宗教解決は教義の厳密な定義をしないヴィア・メディア政策を行い、熱狂的にも論理的にもならず、人々に法的な教会への外面的な服従だけを求めた。国教会は対立を避けるため信仰告白を持たず（三十九箇条は信仰告白ではない）、神学論争を嫌い、カトリック教徒と異端以外は包括的にすべての者を受け入れようとした。これによりイングランドは相対的に長期の平和と繁栄を享受し、ジェームズ一世も中道を継承したが、チャールズ一世の時代（1625-49）にアルミニウス派が多数派となり、カルヴィニストは徐々に排除され「中道」が狭まっていく。

この時代に、イングランドの保守思想が意識化され言語化されるのは必然であった。アングリカニズム思想を確立したのはエリザベス朝の神学者リチャード・フッカーであったが、しかし神学は別として明確な人間類型を持つカトリックやピューリタンとは異なり、アングリカンの人間像は17世紀中庸になっても未定型なままであった。もはや内乱以前の宮廷人や貴族階級は模範とはならず、シェイクスピアの作品は時代に埋没し、ジョンソン博士、フィールドینگ、ワーズワースもサッカーもディケンズもいなかった。

ウォルトンは、ジェントリ階級のエートスを基にして、イギリス人的な考え方と振る舞いと物言いの模範・典型を、血の通った人間の姿にして、読む楽しみと一緒に提示した。『釣魚大全』（1654-76）と『伝記集』（1640-78）はより積極的に宥和と総合を志向しており、宗教改革以来の分裂の超克をつねに課題とする保守的人間のアイデンティティを明確にし、安心立命を与えようとしている。ウォルトンの描いたアングリカンの人間像は、信心深く、柔和、素朴で包容的であり、極論を嫌い、理性的で中庸であった。『釣魚大全』（*The Compleat Angler*）は「コンプリート・アングリカン」を暗示しており、巻末のモットーは「平静であるように努めなさい Study to be quiet.」である。これらの著作は硬直した宗教的反動とは無縁であった。イングランド人の気質に合う包括的な共同体的統合感覚を持ちながらも、改革派との対応の中で、合理的批判的な開かれた性質を持つ点で、より普遍的な世俗性と近代性を内に秘めている。

5人の国教会徒の生涯を集めた『伝記集』は、アングリカニズムのアポロギアという性格を持っている。『ダン伝』では、カトリックからの改宗者が国教会の高位聖職者となる人生を描くことでイングランド宗教改革の正統性を示している。『サー・ヘンリー・ウォットン伝』では外交官ウォットンがヴェネチアで宗教改革を画策する。大主教シェルドンの依頼で執筆した『リチャード・フッカー伝』は、王政復古後の国教会の理論に正統性と権威を与える意図を持っていた。『ジョージ・ハーバート伝』には、司祭たちにアングリカニズムの精神を吹き込む目的があった。『ロバート・サンダーソン伝』執筆の意図は、議会派に対する最終的勝利を半ば公的に宣言することであった。

## 『ジョン・ダン伝』に見られる国教会の正統化、分裂と融合、聖職者の伝記と俗人の伝記の融合

この伝記ではダンの改宗とアウグスティヌスのそれとの連想が喚起されている。二人の人生を重ね合わせて、ダンの聖職者としての権威付けをする。野心的で放縦な青春時代から改心して、以後敬虔な後半生を送る人生の軌跡が似ている。しかしウォルトンにとって大切なのは二人が改宗したという事実であった。初期教会最大の教父のマニ教からキリスト教への改宗と、国教会の高位聖職者・花形説教者ダンのカトリックからアングリカンへの改宗との類似性を強調する目的があったと考えられる。ウォルトンは「今や英国国教会は第二の聖アウグスティヌスを得た」と言う。イングランドの再旧教化を目論むローマに向かって、宗教改革後の英国国教会の正統性を主張し、ローマ・カトリックと対等の立場にあることを主張する意図が込められていたと推測される。その意味でこの作品が17世紀イングランドの聖職者の伝記の精神を継ぐものであることが判る。

国教会はカトリシズムとプロテスタンティズム双方の相矛盾する要素を包括する教会となったが、チューダー朝からステュアート朝を生きたダンの人生と作品に見られる分裂とその融合は、国教会の在り方と類似している。相矛盾する要素は様々である。カトリック教徒からプロテスタントへの改宗、俗人と聖職者、青春時代の放蕩とアンへの純愛、軽薄な機知に富む恋愛詩と真剣な宗教詩、洒落な都会的軽口と深刻な思索と深い瞑想、アウグスティヌス主義的な否定

的人間観とトマス的な肯定的人間観、中世的神学と新しい哲学、カルヴィンへの尊敬とアルミニウス主義の受容、国教会政策への恭順の意と大主教ウィリアム・ロードへの屈折、ダンはいずれの分裂を一身の中に包容し、それらを融合させた人格を持ち、人生を送った。そしてウォルトンの描く分裂と融合を一身に体現するダン像は巧まらずしてアングリカニズムの隠喩になっている。

ダンの人生は、「聖職者の伝記」と「俗人の親密な伝記」という二種類の伝記を必要とし、ウォルトンはダンの真実の肖像を描き出すために、正直にその二種類の伝記の方法・諸要素を混在させ融合させている。それは社会から要請される記念碑としての公的性格と、ウォルトンの親密な気持ち（愛情、友情）とを、伝記の中に融合させるために不可欠であった。結果的に宗教的伝記の伝統的形式からの逸脱、ジャンルの混交、近代的な要素と中世以来の表現の共存・融合などが生じ、矛盾する諸要素が緊張と劇的印象を生み出し、『ダン伝』の独自性・重要性、ジャンルにおける新しさとも可能性を見ることが出来る。

## 宗教と政治に左右されるウォルトン批評

5人の国教会徒を描いた『伝記集』という著作が、アングリカニズム的人間像の史的形を先導したのだという言い方も可能かもしれない。批評史を見ると、賛辞や肯定的評価がある一方で、現代的基準からウォルトンの事実性を問題視する論者や、また国教会信仰に反感を抱くあるいは対立する思想を持つ人々から批判されることになった。イングランド宗教改革で顕在化し、内乱で決定的に分裂し、王政復古で定着することになる、対立する二つの政治と宗教・思想信条の流れ、二通りの世界観が、さまざまな形でウォルトン評価に影響を与えている。

初めて『釣魚大全』を敵意を持って批判したのはピューリタンでクロムウェルの兵士リチャード・フランクであること、また18世紀のウォルトン復活の立役者がジョンソン博士であるのは偶然ではなく、政治的・宗教的理由があるであろう。19世紀のロマン派文人たちはウォルトンを敬愛したが、イングランドの生き方に対する反逆児・異端児パイロンは『ドン・ジュアン』で『釣魚大全』を批判しており、また反トーリーの詩人・批評家リー・ハントもウォルトンを厳しく批判している。19世紀末には、レズリー・スティーヴンは、『ダン伝』に破壊的な評を下したが、「不可知論者の弁護」を書いた宗教的背景を考えざるを得ない。20世紀に入りヴィクトリア朝への反発とモダニズムと左翼思想が全盛期を迎える知識人の時代において、ウォルトンの作品は批評の対象から決定的に外されることになっていく。無神論者リットン・ストレイチーはジョン・オーブリー論の中で、文学的修辞を排し事実の収集と記述に徹するオーブリーに近代を見ている。外交官でマルクス主義史家ハーバート・ノーマンは、「オーブリーの文章に接するとき、われわれは、中世的世界から近代的世界に突如として投げ出されたような感じを覚える」と書いてウォルトンに低い評価を与えている。

## おわりに

ウォルトンが国教会擁護と5名に対する敬愛の情から伝記を書いたとき、現代とは別の方法論を持っていた。ウォルトンは、友人として会話や出来事などの個人的な記憶を大切に主観的になることを避けていない。ウォルトンは、序文中の「私の拙い筆が、真実の手に導かれて描ける限りで最高の、著者の生涯の飾らぬ肖像を世の中に示そうと決心した」と言うが、「真実の手」とは宗教的メタファーである。自分が主観的に描く肖像が真実であることへの自信を表している。ウォルトンは『伝記集』と『釣魚大全』において、アングリカニズム的人間像の模範を、等身大の人間の姿で描こうとした。

歴史的に見れば、この二冊の本は17世紀の国教会聖職者や保守派の人々、あるいは釣り人達に広く読まれ、英国民のアイデンティティ形成に貢献したと言えるであろう。しかしウォルトンの二冊の著作が、世俗化し当時の宗教的文脈への理解が失われた現代においても愛読されているのには理由があるであろう。文学作品としての魅力に加えて、作品に描かれた中庸で素朴で柔和な人間のあり方が時代を超える普遍性を持っており、それによって多くの読者の共感を得ているのだと考えられる。

## <主要参考文献>

Anderson, J. H., *Biographical Truth: The Representation of Historical Persons in Tudor-Stuart Writing*, Yale UP, 1984.

Martin, Jessica, *Walton's Lives: Conformist Commemorations and the Rise of Biography*, OUP, 2001.

Novarr, David, *The Making of Walton's Lives*, Cornell Studies in English, Cornell UP, 1958.

曾村充利『釣り師と文学 アイザック・ウォルトン研究 イギリス保守主義の源流』(増補新版)法政大学出版局、2021年。

ウォルトン、アイザック『ジョン・ダン博士の生涯』曾村充利訳、こびあん書房、1993年。